

あり、後の診療に散見される。他に蘭学にも力を入れていた様である。種痘に関する知識はこの時得られたと推測する。履歴書には華岡清州の門人高階清介に外科を学びとあるが日記にも厨費簿にも記載されていない。おそらく2度目の遊学に学んだのであろう。

京遊厨費簿を検討してみて、約1年間の遊学生活ではあるがかなり高額な費用が掛かっている。京遊厨費簿はおそらくスポンサーの父宗仙に提出するためと考えられる節が諸処に見られる。所謂公式報告書であらう。

(平成24年11月例会)

MRの歴史

——日本最初のプロパー誕生から百年——

西川 隆

今日、わが国製薬企業に在籍する現役の認定MRは、63,875名(2011年)を数える。1912年(明治45)にMRの前身である近代的なプロパーが誕生して今年で百年を迎えた。

プロパガンダに由来するプロパーの名称が、国際的に用いられているMR(Medical Representative)に変わったのは1991年(平成3)だが、医療機関を訪問して医薬品の情報提供を行い、それを通して自社製品の普及(販売)を図る目的は、明治末期に誕生して以来、今日までほぼ変わらない。

本報告では、百年の歴史のなかでプロパー誕生の黎明期に焦点を絞り、下記3点について述べる。

1) プロパー誕生の背景

明治政府の医療政策のもとで、プロパー誕生には2つの要因があった。1つは、横浜・神戸の外国商館を通じて輸入される洋薬の増加である。すでにこの時期には外国商館に日本人薬剤師が就職し、輸入洋薬の説明書の翻訳を行いながら、国内企業家への販売や病院・開業医へ翻訳文献の送付、さらに直接訪問して、洋薬の普及に乗り出していた。

もう1つは、国内企業家の洋薬指向(輸入・製造)の急激な高揚がある。国内企業家のこうした傾向は、外国商館を通じて購入した輸入洋薬を注文に応じて各地の病院・開業医へ販売することで、急速に財力を増加させた大阪道修町の和漢薬

問屋ご三家(武田・塩野義・田辺)が、洋薬の輸入に止まらず製造・販売へ転換し、自社製品の管理・販売に薬剤師が関わり始めていた。一方、横浜から東京へ進出した三共は、高峰讓吉が特許をもつタカザアスターゼの販売権を獲得、米国パーク・デービス社から輸入、国内における試売を始める状況にあった。

2) ドイツ人医師エベリングと日本人第一号

プロパー 二宮昌平

こうした明治末期、自社製品として洋薬の輸入・製造・販売を手さぐり状態で始まるなか、わが国プロパーの近代化に重要な役割を演じたのが、ロシュ社のエベリングと、その指導を受けた二宮昌平である。ドイツ人医師でロシュ本社東洋部次長のエベリングが同社製品「ジガーレン」(ジギタリス製剤)を普及させる目的で、1911年(明治44)春来日。普及するために「医学知識があり、ドイツ語堪能」な日本人薬剤師を必要とした。しかし、そのような薬剤師は見つからず、12月になってようやく大沢道之助(横浜・ドイツ系薬局主任薬剤師)、丹羽藤吉郎(東大病院模範薬局長・医学部薬学科教授)の紹介・仲立ちにより、今日の東京薬科大学を卒業し、東大病院模範薬局で研鑽を積んだ二宮(松沢病院薬局長)と面接、エベリングは即決で採用を決めた。二宮の任務は契約書にWissenschaftliches Propaganda、つまりロシュ

製品の科学的宣伝を行うと記されていた。

二宮がエベリングから最初に教わったことは、プロパガンダの相手が医師だから「セールス行為に出ない」というプロパガンダの精神であった。そして翌1912年(明治45)1月からエベリングに同行して欧州式の近代のかつ組織的プロパガンダを開始した。そのやり方は、わが国では全く行われていない方法だった。大学や医師会単位で主要医師を一堂に集め、ポータブル用ディスプレイを用いて製品を展示し、サンプルや文献を使用して、エベリングが講演、それを二宮が通訳、さらに質疑応答を行い、終了後は宴会を開くというものであった。服装は2人ともフロックコートに山高帽を着用し人力車で会場入りした。病院や開業医を訪問する場合も、人力車に乗り、同じ服装で、同じ方法で説明・宣伝を行った。このような宣伝方法や服装は、他社プロパーも真似し、「セールス行為に出ない」の精神と共に引き継がれた。

演者は、こうしたエベリングと二宮が1912年から実施した組織的・学術的宣伝方法とその精神を今日のMR活動の原点と捉え、二宮を日本人プロパーの第一号¹⁾と位置づけ、2人のプロフィール

を紹介した。

3) 黎明期のプロパー先人たち

黎明期に活躍したプロパーの先人は、二宮を含め9社10名が確認されている。このうち柳澤保太郎(武田薬品初代新薬部長、グレラン製薬創業者)、児玉秀衛(塩野義製薬取締役初代新薬部長)、市野瀬潜(京都新薬堂を興し、日本新薬創業者)、林 四郎(鳥居商店初代新薬部長)の4先人を紹介した。

プロパーの名称がMRに変わっても「情報提供」を通して自社製品の普及、つまり「販売」を図る目的は、誕生した百年前から変わらない。そのため両者のバランスを取りつつ、如何にプロモーション活動を行うかが、今日の製薬企業とMRにも引き継がれている課題である。

- 1) 西川 隆: 明治末期から近代的欧州式プロパガンダを実践した最初の日本人MR二宮昌平薬剤師の素顔。薬史学雑誌2007;42(2):131-6

(平成24年12月例会)

口蹄疫の歴史

——その流行と防疫の変遷、現在の課題——

杉浦 勝明

口蹄疫は、口蹄疫ウイルス(Picomaviridae Aphthovirus)の感染により生じる偶蹄類動物(牛、水牛、めん羊、山羊、鹿、豚、イノシシなど)の感染症である。現在でも一部の清浄国を除き、世界中で発生がある。口蹄疫ウイルスは感染家畜の生産性の低下をもたらすほか、伝播力が強く、清浄国に一旦侵入すると大きな被害を生じることから、国際的に最も重要な家畜の感染症の1つとして位置付けられている。

口蹄疫の発生に関する明確な記述は、1546年イタリア人修道士Girolamo Fracastoroによるが、そ

の頃までにヨーロッパ、アジアなどで広く流行していたと推定される。19世紀半ばには南米にも侵入し、20世紀初までにはオセアニア諸国、日本、北中米を除き、世界中で流行を繰り返していた。

ヨーロッパでは、1960年代まで口蹄疫は広域流行を繰り返していた。防疫措置として、第2次世界大戦前までは、大部分の国で弱毒ウイルスの接種(Aphthisation)、高度免疫血清の投与などが実施されていたが、十分な効果はなかった。口蹄疫の清浄化が進んだのは、戦後不活化ワクチンが開発されて以降で、ヨーロッパでは1950年代に